

日本タバコ会社 連載 2

料亭「吉兆」

その夜、佐伯は、榎藤とともに、銀座にある吉兆という料亭にやっていた。ある政治家と面談するためである。今回の相手は、野党第一党である民衆党の田中良蔵副代表である。実は、田中は

「国会からタバコを追放する会」

の会長も勤めているほどのタバコ嫌いである。この会は、与党にも会員が広がっており、事あるごとに喫煙の害を訴えていた。

本来、与党にとって、タバコは大切な票田のひとつである。全国にあるタバコ農家、昔の煙塩販売公社職員、そして、タバコ販売店など、すべて民自党支持者である。

民営化されたあとのNTS職員にとっても、タバコ追放は死活問題であるから、そのまま民自党の支持者となってくれている。民自党の政治家が、テレビの前でこれみよがしに喫煙するのは、これら支持者へのアピールでもある。

しかし、最近になって、閣僚会議が禁煙になったと報道された。逆に、いままで平気で喫煙が許されていたことの方が不思議なことなのだが、支持者にタバコ関係者の多い与党の強い希望で、閣僚会議だけではなく、国会の会議では喫煙が当たり前であった。いまでも与党関係者の会議では、灰皿が用意されている。

田中は、約束の時間より三〇分ほど遅れてやってきた。榎藤は深々と頭を下げると、こう言った。

「田中先生、非常にお忙しい中、時間をとっていただきありがとうございます」

「榎藤社長、頭を上げてください。それにしても驚きましたな。あなたにとって、天敵のようなわたしと会食したいとは、いったい、どういう風の吹き回しですか」

「以前から、田中先生とはじっくり懇談させていただきたいと思っておりました。今日は、ゆっくりお過ごしください」

田中は、にやっと笑うと

「わたしを籠絡しようと思っても無駄なことですよ」

と釘を刺した。

田中は、いまは野党にいるが、もともとは与党の民自党で将来の首相候補といわれたくらいの実力者である。数年前の政界再編で野党に移ったが、いずれ大物政治家であることに変わりはない。

榎藤は、佐伯に命じて料理を運ばせた。今日は、この店で最高に贅を尽くした料理を用意していた。そして、田中が大好きという大吟醸も新潟からわざわざ取り寄せてもらった。

榎藤は、田中に酌を進めると、こう言った。

「田中先生、わたしも大のタバコ嫌いなのです」

と白状した。

田中は驚いたようだ。NTS社長の口から出る言葉ではない。

「実は、ここにおる佐伯もタバコは大の苦手なのです」

そういって、権藤は、タバコの害について、とうとうと述べはじめた。へたをすると、田中よりも詳しい。

「そこまで認識されておるなら、どうしてNTSはタバコの販売をやめないのですか」

「先生の考えはごもっともですが、残念ながら、世の中からタバコがなくなることはありません」

「まあ、その通りかもしれません。しかし、害があると分かっているものを販売するというのは理屈に合わないでしょう」

「もし、NTSがタバコの販売をやめれば、外国のタバコ会社が大挙して日本に押しかけてくるでしょう。そうなれば、利益をごっそり外国の会社に持っていかれることになります。それは国益に反します」

「しかし、タバコに対する規制強化は世界の潮流です。いずれ、販売量は減っていくでしょう」

「田中先生。それがそうでもないのです。実は、日本でタバコに対する規制が強化されてから、逆にタバコの販売量は増加の一途をたどっているのですよ」

「そんなことは考えられない」

「いえ、わが社は、ここ数年、増収、増益です。もちろん、タバコ以外の商品を手がけているのも確かですが、やはりタバコの儲けはばかになりません」

「それならば、なおのこと、タバコ税の値上げは早急にやらなければなりません」

「本日、田中先生と懇談したかったのは、そのことなのです」

田中は、やはりという顔をした。こいつらの魂胆はみえみえである。何らかの陳情であることは、分かっていた。

田中を中心とする野党の民衆党では、タバコの税金を一箱あたり五〇〇円値上げする法案を提出する構えである。与党の反対で、否決されるだろうが、与党の中にも法案賛成を表明する議員が出てきている。

「先生は、タバコを吸う人間をどう思われますか」

「愚かな連中と思います。毒にしかないものを吸う。しかも、自分たちが、ニコチン中毒ということを認識していない」

「まったく、同感ですな。あの連中はタバコが吸いたいのではなく、ニコチンを摂取したいだけなのです」

田中は、ほおという顔で、権藤を見た。

「その証拠に、アメリカでニコチンの入っていないタバコが開発されたことがありますが、まったく売れなかったそうです」

「当たり前でしょう。ニコチンがなければ、不快な煙です」

「しかし、そのニコチンが欲しいために、他人に多大な迷惑をかける。ひどいと思いませんか」

「同感です」

「つまり、田中先生。しょせん、タバコを吸う連中はバカということでしょう」

「そうですね。全員がバカとは言いませんが、愚かな連中であることは確かです」

「だったら、そんな連中には、この世から早くいなくなってもらったほうが良いということになりませんか」

田中は言葉につまっている。権藤の真意が分からないからだ。

「日本は、高齢化が進んで大問題になっています」

「そうですね。年金問題しかり、医療費もばかになりません。日本のいびつな年齢構成は、日本の将来を危うくするものと危惧しております」

佐伯は、それは国会議員も同じだろうと思った。いまの議員の年齢は、一般社会よりもはるかに高齢である。自分たちこそが、日本の将来を危うくする元凶とは気づかないのだろうか。

権藤は続けた。

「それに、統計的には、犯罪者のほとんどは、喫煙者です」

田中は、権藤の言っている意味がようやく分かってきた。

「それは、喫煙者にはどんどんタバコを吸わせて、早く死んでもらえばいいということですか」

「吸いたい人間は、無理にやめさせたりせずに、吸わせたらどうかということです。へたに吸うなと言っても、反感を買うだけです」

田中は考えこんでいる。

「民自党の年寄りには喫煙者が多いではないですか」

佐伯は、テレビ画面の前で平気にタバコを吸っている参議院の赤木幹事長のことを思い出した。権藤は続けた。

「非喫煙者にとって迷惑なのは、副流煙です。ニコチン中毒患者のせいで、まわりのものが毒ガスを吸わされる。いわゆる受動喫煙問題ですな。だったら、無理に禁煙を進めず、完全分煙を目指すというほうが賢明ではないでしょうか」

「確かに、権藤さんの言うことにも一理ありますな」

田中は、権藤に対して持っていた嫌悪感が薄れていくことに気づいていた。権藤がタバコを吸わないと知ったこともある。喫煙者がいかに迷惑かということは、非喫煙者にしかわからない。権藤には、その気持ちが分かるはずだ。

「喫煙所を完備しろということですか」

「まさに、その通りです。いまの鉄道や私鉄の駅の喫煙所、あれは大迷惑です。中毒患者が大勢、集まって、タバコをふかしている。見た目もよくないうえ、あのまわりは煙たくてしょうがありません。しかし、密閉型の喫煙所ならば、周りに迷惑をかけません」

「排煙設備を充実させろということですか」

「その通りです。路上禁煙地区にも、排煙設備の完備した喫煙所を設ければ、喫煙者、非喫煙者、双方にとってハッピーになります」

「なるほど」

田中は大きくうなずいている。所詮、タバコの害を訴えても、喫煙者には馬の耳に念仏である。この世から、タバコがなくなることもないであろう。そうであれば、喫煙者には自由にタバコを吸わせてやる。その代わり、非喫煙者を受動喫煙から守る。それは賢明な選択かもしれない。

田中は、次第に権藤の言うことに引き込まれていった。

「具体的には何をしろと」

「はい、いま国会内を完全禁煙にしようという動きがありますが、それを完全分煙にしたいのです」

「国会内に喫煙できる場所を設けろということですか」

「はい。しかも排煙設備が完備した施設です」

「しかし、それにはコストがかかります。喫煙者のために、そんな高い設備をつくるよりも、完全禁煙にした方が安くて済む。それが、われわれの主張なのです。」

「それは、よく分かります。しかし、喫煙を法律で禁止しないかぎり、いつまでも議論は平行線をたどるのではないのでしょうか」

どうしたものか、田中は悩んでいる。喫煙を禁じる法案は決して国会を通らないだろう。そこに権藤がたたみかけるようにこう言った。

「民自党の国会議員が、喫煙所で偉そうにタバコをふかしている。そんなニュースが流れたら国民はどう思うでしょう。」

田中は、かつてゲリラに占拠された南アメリカの大使館の事件を思い起こしていた。特殊部隊の活躍で、解放された大使は、記者会見でタバコをくわえて登場した。

代々が大使の家に生まれたということで不遜な態度が多く、まわりから輦轡を買っていたが、この一件で、世の中のバッシングを受けた。

ちゃんとした国家試験があるというのに、大使が世襲できるという外国省の制度も問題であるが、大使は偉いと思い違いをしている。当然、喫煙も当たり前と思っていたのだろう。

この事件のせいかどうか分からないが、それまでは、外国省が勝手に合格者を決められていた外交官試験が廃止され、国家公務員試験に組み入れられた。

「よし、分かった。権藤さんの意見を取り入れてみよう。どこまで、できるかわかりませんが、検討には値すると思います」

「さすが、田中先生。ありがとうございます」

田中は、予算をどこに回すかを考えていた。どの省だろうか。しかし、財産省を動かす手もある。なにしろ、タバコは財産省にとって、魅力ある財源であり、NTSは大事な天下

り先である。

それよりも問題なのは、どうやって国会議員を説得するかであろう。与党の国会議員の中には、なんで公衆の面前で、堂々と喫煙できないのかと不快に思っているものも多い。喫煙所などつくっても、素直に従ってくれるかどうかは分からない。

とすると、そこでタバコを吸いたいというような場所にしなければならない。かなり贅沢な喫煙所をつくる必要がある。そして、ふと思った。いや、かえって贅沢なつくりの方が効果があるかもしれない。贅沢な場所で喫煙している国会議員をみたら、多くの国民はあきれ返るだろう。

「田中先生。あわせてお願いがあります。路上喫煙規制地区にも、先生のお力で、何とか喫煙所を設けていただけないでしょう」

「分かりました。確約はできないが、努力してみましよう」

田中は、うなずいた。

確かに、権藤の言うように、すべてのタバコを日本から駆逐するのは無理であろう。何しろ成人男子の二人に一人はタバコを吸うのだ。愚かとはいえ、中毒患者はすぐには直らない。とすれば、完全禁煙ではなく、完全分煙を目指すのも一考かもしれない。多くの、非喫煙者は、喫煙者がタバコを吸うことには文句はない。そのあおりで、毒ガスの副流煙を吸わされることが嫌なだけである。喫煙者の健康などどうでもいいのだ。とすれば、完全分煙が実現できれば、両者から歓迎される。

それから、権藤と田中は、政治の話題に移っていった。NTSは、民衆党への献金を約束した。

権藤は

「いまの日本の政治問題は、政権交代がないことに尽きます。このため、官民の癒着がすみずみまで進んでおります。これが、財政再建の大きな足かせにもなっています。複雑に絡んだ利権構造を根底からただすには、政権交代しかありません」

田中は、わが意を得たりとばかりに、満足そうにうなずいている。

赤木幹事長

それから数日して、佐伯は、与党民自党の参議院幹事長の赤木との宴席を設けるように権藤から指示された。自分がヘビースモーカーとあって、赤木はNTSのシンパである。地盤の選挙民にはタバコ農家が多く、赤木の地盤である地方都市には大きなタバコ工場もある。

権藤は、社長になってから一度も赤木と懇談したことがない。

これには、赤木と会うことを、権藤が意識的に避けてきたという事情がある。当然、赤木との宴席ではタバコを吸うのを覚悟しなければならない。権藤は、副流煙の被害にあわないようにしてきた。しかし、ここまで事態が切迫してくるとしようがない。

佐伯は思った。なんとしても、NTSの社長である権藤が大のタバコ嫌いということを知れば、赤木に悟られてはならない。

権藤は、佐伯に指示して、喫煙する役員を数人同行することにした。そして、赤木と自分の席の間に距離をおこうというわけである。もちろん、役員にはタバコを吸わせない。

案の定、赤木は部屋に入ってくると、当然というように、ポケットからタバコを取り出して火をつけた。

いやな匂いが鼻をつく。しかし、権藤は我慢して赤木に礼を言った。

「これは、赤木先生。お忙しいところをどうもありがとうございます。わたしがNTSの社長になりましてから、すぐに先生と懇談をと思っておりましたが、多忙の先生のこともありまして、なかなか日程があわず、ようやく本日、尊顔を拝することができました」

赤木は、自分がどれだけタバコ会社に貢献しているかに対しては、自信を持っているので、権藤の慇懃さは当然のことと受け止めている。

赤木は、一九八四年にタバコ事業法という法律の国会通過を画策した中心人物である。この法律では

「我が国タバコ産業の健全な発展を図り、もって財政収入の安定的確保をめざす」

とされている。何のことはない。国が喫煙を進めているのである。まさに、健康推進法と矛盾する法律であるが、いまだに、この法律は有効である。

始末が悪いのは、この法案が財産省によるものであり、健康推進法が保健省によるものであることだ。省の力関係で言えば、百倍ほどの違いがある。権藤は、こんな悪法は通すべきではないと感じていたが、政治の力で、何の反対もなく通ってしまった。

赤木は、上座に座っている。権藤は、タバコの煙がいやなので、赤木からは、かなり離れた場所に座っている。それを赤木は、権藤の遠慮と思ったようだ。

「そうそう、権藤さん。この間はていねいな挨拶をありがとう」

と赤木は礼を言った。選挙見舞いとして、赤木のもとに現ナマを一億円ほど運んだことに對する礼である。権藤は、赤木との会合を避けてきたが、金によるサポートは惜しまなかった。

いまだに与党の民自党は、選挙を金に頼っている。選挙民に飲ませ食わせて、頭を下げる。これが、いちばん効果的であると考えているのだ。都会なら、いざしらず、田舎の選挙は相変わらず、いかに選挙民にいい思いをさせるかで票差がつく。

ところが、最近は、政治資金に対する規制強化や制度改革で、政治家の懐に金が入りにくくなった。領収書のいらない現金は、政治家にとって喉から手が出るほど欲しいものである。

「ところで、今日は、どうされました。これだけ、部下を引き連れて来たということは、単なる懇談というわけではないでしょ」

赤木のタバコは止まることがない。すでに、部屋の中は、煙が充満している。

佐伯は、それとなく換気扇を回すように女将に指示を出した。

「実は、今日は先生にお願いがあっただけでした」

「権藤さんやNTSさんには大変な世話になっている。できるだけことは致しましょう」

「先生にそう言っていただくと、われわれとしも心強い限りです」

権藤は、部屋の空気が汚れているのを感じて、不快な気分になった。

おそらく、一酸化炭素濃度はかなり上がっているに違いない。タールも、用意した膳に降り注いでいるだろう。

しかし、権藤は、そんなことはおくびにも出さずに、赤木に笑顔を向けた。

「先生もご存知かと思いますが、現在、国会内を完全禁煙にしようという動きがあります」

「ああ、あの田中のばかが音頭をとっているやつだろう。道理の分からないバカな連中の集まりだ。国会からタバコを追放する会などという下らない会をつくりおって。」

「おっしゃるとおりです。しかも、その会には与党からも何人かが参加しております」

「おお、知っとる。おろかな連中だ。あいつらには、今度の選挙では公認はやらん」

「先生のお気持ちは十分理解しております。われわれNTSにとっても、国会が完全禁煙になるというのは大変な痛手であります。ただでさえ、喫煙者の肩身はどんどん狭くなるばかりですからな」

「タバコは嗜好品だと、前から言っておる。どこで、誰が吸おうと勝手なことだ。他人がとやかく言う問題ではない」

「先生に、そのようにおっしゃっていただけると、タバコを販売するわれわれも勇気百倍です」

「タバコ会社だけではない。わたしのバックには、全国のタバコ農家や、タバコ販売店など、数多くの支援者がいる。ここで、負けるわけにはいかんのだ」

「ありがとうございます。先生のご努力は、よく理解しております」

赤木は、当たり前と言わんばかりに鼻を鳴らすと、口から煙を吐き出した。

「しかしながら、先生もご存知のように、喫煙に対して、世間一般の目が厳しくなっているのも事実でございます」

「そんなのは、無視していればいいだろう。喫煙率だって、成人男子の半分以上を占めているはずだ。つまり、過半数は喫煙支持者というわけだ」

「確かに、統計で発表される数値よりも喫煙者が多いのは確かです。それに、統計では、二〇歳以下のものは喫煙しないとされていますからな」

「そうじゃよ。わしだって中学校の頃から喫煙しとる。酒とタバコは大人の男の必需品と決まっておる。それなりの歳になったら、タバコに興味を示すのは、むしろ人間として健全な証拠だろう」

「ごもっともです。ただし、先生のような実力者と違いまして、われわれタバコ会社は弱い立場にあります。先生のような正論だけでは戦えません。やはり、タバコはいやだというひとの意見にも少しは耳を傾けなければならないのです」

「あいつらは、われわれ喫煙者が空気を汚していると文句を言うが、空気は誰のものでも

ない。みんなのものだろう。タバコの煙が嫌だというなら、家にこもっていればいいんだ」
「おっしゃる通りですが、それを言っても、タバコ会社の主張は、なかなか一般のひとには理解してもらえません」

「それで、俺にどうしろと言うんだ」

赤木は次第に不機嫌になってきたようだ。

「実は、先日、田中先生にお会いして、国会内を完全禁煙にするという運動の件で、あるお願いをしてまいりました」

「まさか、お前らは、田中のバカにも献金しているわけではないだろうな」

「とんでもありません。NTSにとっては、田中先生は不倶戴天の敵といっても過言ではありません」

当たり前だというふうに赤木は大きくうなずいた。

「実は、田中先生にお願いしたのは、国会内を完全禁煙にするという提案を取り下げてくださいということです」

「ほお、それで、あのバカはなんと言った」

「それはできないと言われました」

「それは、そうだろう」

「しかし、意見交換する中で、ある譲歩案を引き出しました」

赤木の隣には、総務課の課長を座らしている。赤木の杯に、酒をつぐ役目だ。赤木は、先ほどからあおるように酒を飲んでいいる。その合間にも、タバコを吸い続けている。

「譲歩案。それは、いったいなんだ？」

「はい、国会内を完全分煙にするという案です」

「分煙？」

「ええ、国会内に喫煙所を設けるという案です」

すると、赤木は怒り狂った。

「なんで、タバコを吸うために、わざわざ蛸つぼのような部屋に行かなければならないんだ。俺は、これからも堂々と国会内でタバコを吸ってやる」

「しかし、それでは、向こうも納得してくれません。喫煙に対するアレルギーは国民の間でも高まっています。ここは、先生にも譲歩を願えないでしょうか」

赤木は不満そうだ。

「もちろん、喫煙所はいままでのような狭苦しいものではなく、喫煙されるかたが、ゆっくりと休める空間にさせていただく予定です。その点も、先生から要求していただければと思います」

赤木は、少し考えている。

赤木としても、最近の国民の喫煙に対する意見を完全に無視するわけにはいかないからだ。特に、昔と違って、女性が選挙に積極的に参加するようになっている。

あまり、偉そうにタバコをふかしていると、女性票を失うことにもなりかねない。以前、

秘書から、この点を指摘されたこともある。

「もちろん、先生がこの案に賛同していただければ、NTSとしても最大限の支援をさせていただきます積りです」

権藤は、佐伯に目配せした。とりあえず、三〇〇〇万円の現ナマを用意してきた。赤木は、袋の中をのぞいてから

「領収書はいらんのか」

と聞いてきた。

「もちろんでございます」

権藤は言った。

「まあ、喧嘩するだけが能ではないか」

「先生の理解が得られれば、百万力を得たも同然です」

現ナマの効果は大きい。最近の政治家は、誰もが金に困っている。昔のように、簡単に裏金がつくれなくなっているからだ。

「それに、先生が豪華な喫煙室でゆっくりくつろいでいる姿が映像として流れれば、先生の支持者の理解も得られるのではないでしょうか」

「それもそうだな」

と赤木はうなずいた。

権藤は、やはりこいつはバカだと思った。いま時、タバコをふかして踏ん反り返っている姿がテレビ画面に流れれば、国民の反発を買うのは必至である。

業界団体の支持で、のしてきた政治家の限界を見たような気がした。とは言っても、与党の実力者である。ここは、黙っておだてるしかない。

「先生、わたしは、ここで失礼しますが、後は芸者を用意しておりますので、ゆっくりして行って下さい」

赤木は鷹揚に手を上げ、権藤の失礼を許した。権藤は、佐伯を連れて、車に乗ると、上着を着替えた。

「あのバカ、加減というものを知らんな。あれだけ、ひっきりなしにタバコを吸われたのでは、部屋が煙で充満してしまった。おかげで、着ているものがタバコの匂いで台無しだ」

権藤は、料理にいっさい手を出していない。

おそらく、あの高級な食材は、タールで汚染されている。発癌剤を好んで、摂取するほど自分はバカではない。

しかし、ひとつの懸案はこれで片付きそうだ。権藤は胸をなでおろした。禁煙だ。いや喫煙だということで、国会内の議論が平行線をたどっていたのでは、埒が明かない。マスコミも、よろこんで、この話題を報道する。

それでは、タバコ会社にとって、ますます不利になる。タバコ報道で、タバコ会社の味方してくれる記事はほとんどない。分煙ということで決着してくれれば、タバコ会社にとってもありがたいことなのである。